

## 時間論にみる一つの問題点III

### ——デカルト哲学の場合——

岩 本 一 夫

本稿の目的が、「時間とは何か」を、即ち時間の本質規定を求めるものではなく、時間が問われる場とも言うべきものの解明を通して、各時間論の持つ問題点を指摘することにあることは既に述べたところである<sup>1)</sup>。確かに時間が人間存在に深く関わるものであることは各時間論のよく示すところである。問題は、この関わりがいかなるものであるか、である。この問題は帰するところ、人間存在をいかなる場に位置付けるか、或は、人間存在を何に対するものとして位置付けるかにかかっていると思われる。そこから、時間も、人間存在の外に現実的にあるものと見做す見方と、人間存在の内側にあるものと見做す見方の二つに分かれてくる。便宜上、前者を外的時間、後者を内的時間と名付け、外的時間論の例として、プラトンとアリストテレスのそれを、内的時間論の、それも嚆矢としての例としてアウグスティヌスの場合をそれぞれ拙論「時間論にみる一つの問題点I」「II」に於いて考察した<sup>2)</sup>。

この二種の時間論は、人間知性の歴史的発展と言った、言わば進化論的な説明とは全く無縁なものであって、人間存在の根本的位置付けの相違に由来するものと思われる。即ち、自然に対する人間の位置付けの相違である。プラトンにとってもアリストテレスにとっても、人間は自然の一部であり、自然に対する絶えまないテオリアによって、自然の第一原因が追求される。アリストテレスに倣って言うならば、人間は「本性的に」或は「生まれながらに」*φύσει*<sup>3)</sup>、全自然の目的因的秩序に組み込まれている。この様に人間存在に主体性を置かない位置付けにおいては、時間はプラトンの

如く端的に「宇宙を秩序付けるもの」であるか、アリストテレスの如く、「運動の前、後に関する数」として人間存在の外側に実在的にあるものと見做される<sup>4)</sup>。

これに対して内的時間論に立つアウグスティヌスにとっては、人間は単に自然の目的因的系列の一部ではない。古典ギリシア期の哲学者たちが全く与かり知らなかったヘブライズムの基本的発想構造の一つは、超自然と自然の厳格なる二分法である。この二分法にあって、人間は単に自然に属するのではなく、言わば、その狭間にあって、そのどちらを選択するかの実存的決断に常に迫られているのである。宗教的に言うならば、超自然を決断することが信仰であり、救いであり、自然法則からの自由である。アウグスティヌスの全著作はこの決断への苦悩とその過程の表明であると言っても過言ではなからう。この様な人間の位置付けにあっては、人間は自然に相対するものであり、自然的存在、言い換えれば、自然の因果律に縛られてはならない存在だと言う根本的人間理解を暗黙裡に基礎付けることになる。これが、西欧キリスト教世界に於ける人間存在の位置付けに関する底流である。

このヘブライ的構造にあって、時間は自然の中にある。アウグスティヌスにとって時間は、「被造物なしには、いかなる時間も存在し得ない。」*nullum tempus esse posse sine creatura*<sup>5)</sup>。のであり、神の天地創造と共に始まる。それでは何故アウグスティヌスにあっては時間が神によって与えられた宇宙秩序とも言うべきもの或は、自然の因果系列を計る基準の如きものと言った外的時間と考えられなかったのだろうか。アウグスティヌスは時間を「魂そのものの延長」*distentio ipsius*

animi<sup>6)</sup>と定義しているのである。この点に関して明確にしておかなければならないのは、scire 即ち「知る」の対象である。プラトンやアリストテレスに於いては「知」の対象は自然以外にはない。自然が全てであった。しかしアウグスティヌスにあっては、「知」の対象は二方向に分離する。即ち超自然の領域、つまり神と、自然の領域の二つである。アウグスティヌスはこれら二つの領域の内、神のみに関心があり、自然には全くと言ってよい程、なかった。ソリロキアで言明する如く「神と魂」の関係のみが関心の中心であった<sup>7)</sup>。従って時間考察の糸口もわれわれの受け取る時間についての印象とでも言うべきものからである。即ち、『告白』第 11 巻第 15 章では、「にもかかわらず、われわれは長い時間とか短い時とかと言う。」<sup>8)</sup>で始められている。長い過去とか短い過去、長い未来とか短い未来はわれわれの記憶と期待の中に存在するのであって、現に存在するものではないと言う。ここからアウグスティヌスの有名な定義「過去であるものについての現在が記憶であり、現在であるものについての現在が注視であり、未来であるものについての現在が期待である。」*praesens de praeteritis memoria, praesens de praesentibus contuitus, praesens de futuris expectatio*<sup>9)</sup>。が導き出される。つまり現在しかないのであるが、現在が一瞬の幅もないとすれば、現在があるとして言い得えようか、現に在るのは魂であると言うことになる。即ち、「私の魂よ、汝の内に時間は計られる」*In te, anime meus, tempora metior*<sup>10)</sup>ことになる。

これは一種のトートロジーではなかろうか。魂しかない、魂は時間を問題にする。従って時間は魂の内にしかない、と言っているのと等しいのではなかろうか。天体の運行を基準に、或はセシウムの振動を基準に計られた 1 年、1 日、1 時間が時間と規定したとしても同様に規定自体としては、どちらが時間の本質規定であると決定することができるだろうか。問題は関心の所在ではなかろうか。即ち、「私の魂」にのみ主体性が置かれているのか、私の外なる自然認識に主体性が置かれているか、である。デカルト哲学に於ける時間論の問

題点を論ずる前にこの点を指摘しておきたい。更に、これに関連してもう一つの点を指摘しておきたい。

それは、拙論 I・II に於いて論じた所であるが、永遠なるものには時間はないと言うことである。プラトンのイデアは、それをモデルに時間が造られた「永遠の生ける存在<sup>11)</sup>」である限り時間の外にあったし、アリストテレスも、「常に存在するものは常に存在するものである限り、時間のうちには存在しないということは明らかである。」<sup>12)</sup>と明言している。アウグスティヌスにとっても、超自然の神の領域では時間はないとして、「時間自体もあなたが造られたのであり、あなたが時間を造られる以前に時間が過ぎ去ると言うこともなかったのだから。」*Id ipsum enim tempus tu feceras, nec praeterire potuerunt tempora, antequam faceres tempora*<sup>13)</sup>。と記している。

ここに本論と直接関係のない一つの疑問が生ずるかもしれない。それは、プラトンのイデアもアリストテレスの第 1 原因も時間を超えた存在である限りで超自然的存在であるかという問題である。結論的に言うなら否である。この問題は超自然の検討と共に別の機会に譲らなければならない。ここでは、以上の二点を確認した上で、デカルト哲学に於ける時間論の検討に進みたい。

## 二

デカルト哲学に於ける時間論と言っても、ごく僅かな言及のみであって、むしろデカルト哲学にとって時間は余り重要な役割を果たしているとは思われない。本稿で問題にしたいのは「何故デカルト哲学に於いては時間が重要な役割を果たさないのか」と言うことである。何故なら、重要な役割を果たさないこと自体がデカルトの人間存在に関する基本了解を示唆すると思われるからである。

時間論のまとめたものは、『哲学の原理』*Principia Philosophiae* 第 1 部 57 の次の如き一節のみである。

*Alia autem sunt in rebus ipsis, quarum attributa vel modi esse dicuntur; alia vero in nostra tantum cogitatione. Ita, cum tempus a*

duratione generaliter sumpta distinguimus, dicimusque esse numerum motus, est tantum modus cogitandi; neque enim profecto intelligimus in motu aliam durationem quam in rebus non motis: ut patet ex eo quod, si duo corpora, unum tarde, aliud celeriter per horam moveatur, non plus temporis in uno quam in alio numeremus, etsi multo plus sit motus. Sed ut rerum omnium durationem metiamur, comparamus illam cum duratione motum illorum maximorum, et maxime aequabilium, a quibus fiunt anni at dies; hancque durationem tempus vocamus. Quod proinde nihil, praeter modum cogitandi, durationi generaliter sumptae superaddit<sup>14)</sup>. (ところで、属性とか様態であると言われるもののあるものは事物自体の中にあり、あるものは単に我々の思惟の中にある。従って、我々が一般的な意味での持続から時間を区別し、運動の数であると言う場合、この場合の時間は思惟の様態に過ぎないのである。何故なら、我々は運動中の持続と運動していない事物中の持続とを別のものとは全く考えていないからである。このことは、次のことから明らかである。即ち、もし二つの物体の内一方がゆっくりと、他方は速く1時間内に動くとするれば、運動ははるかに多いにしても一方より他方の方が時間的に多いと言うことはない、しかし、あらゆる事物の持続を計るために、年や日がそれに由来する最も大きくて最も均一な運動の持続とを比較し、この持続を時間と呼んでいるのである。従って、時間は、思惟の様態以外には何ものも、一般的意味での持続に付け加えるものではないのである。)

これによればデカルトにとって時間とは、事物の持続を計るための思惟の様態、言い換えれば、「我々がこの持続を考える場合の一つのやり方」、une certaine façon dont nous pensons à cette durée<sup>15)</sup>に過ぎない。では、事物の持続 duratio rei とは何かと言えば、「事物が存在し続ける限りで我々がその事物を考慮の対象としているその様

態」 tantum modum sub quo concipimus rem istam, quatenus esse perseverat<sup>16)</sup>。と定義されている。ちなみにピコによるフランス語訳を引くならば、un mode ou une façon dont nous considérons cette chose en tant qu'elle contienne d'estre<sup>17)</sup>とある。

従って時間は事物自体にあるのではなく、思惟を本質とする我々の精神 mens が事物をその対象とするとき、その事物の存続を計る一つのやり方として思惟自体に属しているものである。問題は持続の計測にあつて、この持続の前と後、或は過去と未来には全く言及はないし、関心もない。これは何故であろうか、又計測とは何であろうか。

### 三

デカルト哲学の方法とその二元論的体系はよく知られているところである。即ち、所謂方法的懷疑によって、まず思惟する精神、或は魂の存在を確認する。この「思惟の実体性」から「神の存在証明」に赴く。何故なら、「我の存在」は直接的に知られ得るが、それ以外の存在の明証性は、神の存在に依存すると考えられているからである。「明証性の規則」、つまり、「我々が明晰に認識するのは全て真である」という規則を保証するものが「神の誠実性」である。ここから、物体的実体の存在が帰結される<sup>18)</sup>。これらの諸原理から世界の諸々の現象を統一的に説明しようとしたのがデカルト哲学の意図であった。

この方法と体系の検討は別の機会に譲らなければならない。ここで指摘しておきたいことは、アウグスティヌスの場合にも注意を促した如く、人間の魂・精神から出発しているという点である。唯、アウグスティヌスに見られた如き「神と自然」「超自然と自然」の二者択一はデカルトにはないと言うことである。アウグスティヌスの魂は、「その秩序が分らない時間の内に飛び散り、喧噪と雑多でその思惟が最奥まで切り裂かれている。」at ego in tempora dissilui, quorum ordinem nescio, et tumultuosis varietatibus dilaniantur cogitationes meae, intima viscera animae meae<sup>19)</sup>。のである。アウグスティヌスが、時間を超

えた魂の安らぎ、統一を得るのは、「神に於いて」  
in te<sup>20)</sup>のみである。デカルトにはこの魂の分裂は  
見られない。神、或は超自然の領域に関しては『方  
法序説』で次の如く記している。

Je reuerois nostre Theologie, et pretendois,  
autant qu'aucun autre, a gagner le ciel; mais  
ayant appris, comme chose tres assurée, que le  
chemin n'en est pas moins ouuert aux plus  
ignorans qu'aux plus doctes, et que les veritez  
reuelées, qui y conduisent, sont au dessus de  
nostre intelligence, ie n'eusse osé les  
soumettre a la foiblesse de mes  
raisonnemens<sup>21)</sup>,

(私は私たちの神学を尊敬していたし、他の者と  
同様に天国に到ること望んでいた。しかし、そ  
の道は最も無智なる者と同様に最も博学なもの  
にも開かれており、そこに到る啓示された諸真  
理は私たちの知性を超えたものであることを確  
実なものと知って、私はあえてそれらを私の薄  
弱な推論に委ねようとはしなかった……)

デカルトにとっては、神の領域は全ての人に既  
に開かれているのであって、「そこに安らうまで」  
と言う過程は存在しない。魂は幼い頃からそれを  
守ってきた。日々の行動の格率 *maxime* としてデ  
カルトがあげているのは、「私の国の法と習慣に従  
うこと」*d'obeir aux lois et aux coustumes de  
mon païs* だが、それも、同時に「神が私に慈悲を  
たれ幼少より教え導びいてくれた宗教を常に保持  
すること」*retenant constamment la religion en  
laquelle Dieu m'a fait la grace d'estre instruit  
dés mon enfance*<sup>22)</sup>、によってである。デカルトの  
言う精神或は魂はキリスト教的二分法に従うなら  
既に超自然の内にいると言ったら言い過ぎであろ  
うか。

デカルトが魂と物質がそれぞれ独立した実体で  
あるとする二元論はよく知られているところであ  
る。この物質 *matiere* には重さ、固さ、色、熱と  
いった性質はなく、ただ長さ、幅、深さの延長の  
みが認められている。この物質がデカルトにとっ  
て「自然」*nature* と同義語であることが『宇宙論』

*Le Monde* に於いて次の如く言明されている。

Sçachez donc, premierement, que par la  
Nature je n'entend point icy quelque Déesse,  
ou quelque autre sorte de puissance  
imaginaire; mais que je me sers de ce mot,  
pour signifier la Matiere mesme, entant que je  
la considere avec toutes les qualitez que je luy  
ay attribuées, comprises toutes ensemble, et  
sous cette condition que Dieu continuë de la  
conserver en la mesme façon qu'il l'a créée<sup>23)</sup>.  
(そこでまず次のことを知って頂きたい。即ち自  
然ということとここで私の理解しているもの  
は、何らかの女神であるとか、他の何かある種  
の想像上の能力と言ったものではなく、この語  
を私が用いるのは、物質自体を指し示すため  
であるということだ。それも私がそれを考える場  
合には全てのもを含めて私がそれに帰した性  
質全てと一緒にである限りであり、神がそれを  
創造したのと同じ仕方で今も保持し続けている  
限りにおいてである。)

デカルトの言う物質が自然と同意語であるとす  
れば自然は長さ、幅、深さの延長を有するのみで  
あり、所謂機械論的自然が定立されることになる。  
思惟をその本質とする魂と、延長のみを有する物  
体とは互いに全く依存することのない二つの実体  
であるが、人間の場合には精神が特定の物体、即  
ち身体と結合していると言うデカルトの人間観  
は、キリスト教の二分法に基づく人間の位置付け  
と比較してみる時、興味深い符合を示している  
と言い得るのではなかろうか。

#### 四

前節に見た如く、アウグスティヌスの場合と異  
なるとは言え、やはりデカルトも自らの魂が出発  
点であった。この魂が既に超自然の領域にあると  
は言い得ないが、少なくとも物質或は自然を見る  
場合には、その領域からの眼差しによるものと言  
わなければならない。即ち、デカルトの自然学に  
於ける数学の持つ役割がそれを示していると思わ  
れる。

「我の存在」は直接的に知られるが、物質的なものに関する存在の確証については、『省察』*Meditationes de Prima Philosophia* VIの冒頭に次の如く記している。

*Reliquum est ut examinem an res materiales existant. Et quidem jam ad minimum scio illas, quatenus sunt purae Matheseos objectum, posse existere, quandoquidem ipsas clare et distincte percipio*<sup>24)</sup>。

(物質的事物が存在するかどうかの検討が残されている。そして、実際私は少なくともそれらが純粋数学の対象である限りで実在し得るということを既に知っている。と言うのもそれらを明晰判明に知覚するのであるから。)

明晰判明に知覚するものは真であると言う「明証性の原理」は既に触れた如く、「神は欺かない」という「神の誠実性」によって基礎付けられたものであった。ここで問題なのは、物質的事物が実在し得るのは、「純粋数学」の対象である場合だけであるという点である。何故、そうなのか、又「純粋数学」とはいかなるものなのかという問題である。

デカルトの数学上の功績はよく知られている。ギリシア以来、数は非連続な「単位」と考えられ、線は分割可能な連続量と見做され、それぞれを取り扱う数論と幾何学は別のものと考えられて来た。それをデカルトは延長に数を対応させることによって二つを統一した所謂解析幾何学を成立させた。それによって長さ、幅、深さの延長しか認められていない物質、即ち自然は数学的方法に依ってのみ解明されることになる。この場合の自然は、魂或は精神を除く全ての物理現象を意味する。対象とする物理現象の相違に応じて天文学、光学、音楽、機械学等々、全てが数学を基礎とするそんな数学をデカルトは考え、それを「純粋数学」*pura mathesis*、或は「普遍数学」*mathesis universalis*と呼んで次の如く定義している。

*ac proinde generalem quamdam esse debere scientiam quae id omne explicet, quod circa ordinem et mensuram nulli speciali materiae*

*addictam quaeri potest*<sup>25)</sup>。

(何ら特殊な質料を混じえることなく、順序と計量関係について問い求められる全てのことを説明するようなある普遍的学であらねばならない。)

ではこの普遍的学、或は普遍数学の自然への適用の正当性は何によって保証されるのであろうか。デカルトはそれを、人間知性による感覚的对象からの抽象といった解釈をせず、神に由来すると言う。普遍数学の真理を或は永遠的真理と呼びメルセンヌ宛の書簡の中で次の様に書き送っている。

*Mais ie ne laisseray pas de toucher en ma Physique plusieurs questions metaphysiques, et particulièrement celle-cy : Que les verités mathematiques, lesquelles vous nommés eternelles, ont esté establies de Dieu et en dependent entierement, aussi bien que tout le reste des creatures……Ne craignés point, ie vous prie, d'assurer et de publier par tout, que c'est Dieu qui a establi ces lois en la nature, ainsi qu'un Roy establist des lois en son Royausme. Or il n'y en a aucune en particulier que nous ne puissions comprendre si nostre esprit se porte a la consyderer, et elles sont toutes mentibus nostris ingenitae, ainsi qu'un Roy imprimerait ses lois dans le coeur de tous sugets, s'il en auoit aussi bien le pouuoir*<sup>26)</sup>。

(しかし私は、私の自然学でいくつかの形而上学的問題に触れない訳にはいかなかった。特に次のものはそうである、即ち、数学的諸真理、貴下は永遠的真理と名付けているものは、他の全ての被造物と同様、神によって創造され、全くそれに依存するものであるかという問題です。…… どうぞ気がねなく、自然の中にこれらの法則を立てたのは神であって王が自らの王国に法を立てるのと同じだと確信を持ち、どこでも公言なさって下さい。ところで、我々の精神が考察しようとして理解できないような法則も一つとしてありません。ですからそれらの法則は

全て又生まれ持った我々の精神にあるのであって、それは、王が充分な権力を有しているのであれば、全ての部下の心に法を課するのと同じことです。)

文中「生まれ持った我々の精神に」と訳した *mentibus nostris ingenitae* の *mens* と言い、*ingenitus* と言い、この語の文献学的詳細な検当は本論の主張、即ちデカルトの眼差しが既に超自然からのものであることを傍証するものと思われるが、この検討は別の機会に譲らねばならない。しかし、この書簡に明言されている如く、普遍数学の真理、又は永遠的真理は神によって自然の内に刻印されていると同時に人間の知性にも付与されているのであるから、人間の知性が持つ数学的観念は自然の法則に原理的に対応していることになるのである。その意味で、自然の、或は物質の存在は数学の対象である限り人間に知られるのである。

## 五

前節でデカルトの自然学が神の創造になる永遠的真理としての普遍数学に基づくものであること概観したが、これはデカルト哲学の出発点が思惟のみで延長を持たない我の存在にあった必然的帰結であると思われる。何故なら、「我」のみであったなら、「我」の明晰判明に知覚するものの真を保証するものがないに留まらず、個々の我の持つ真の普遍性も証明できないと思われるからである。

第一節で言及した如く永遠の内に時間はない。アウグスティヌスも魂が問題であったが、その魂は自然に落ち、縛られ、神へ到る道を求めて苦悩する魂であった。その限りで、魂を引き裂く「時間」というものが問題であった。しかし、デカルトの魂は、「生まれ持った我々の精神」に付与された永遠的真理で、自然を解明することだった。永遠的である限り、デカルトの自然に於いて「時間」というものが重要な役割を担い得ないのは当然である。デカルトは近代的自我の定立者として近世哲学の祖と称せられ近世哲学との関連のみが論じられてきた。しかし、もし本稿の考察にいくらかの妥当性があるとすれば、言う程に近代的とは言

いがたい。デカルトが後世に与えた影響は「自我」の問題ではなく、その自然研究の方法である。自然を長さ、幅、深さの延長のみと見做し、数学的計量関係で切り取るその方法は確かに現代の科学までつらなる西欧科学の基本的な方法である。この基本的な方法がキリスト教的二分法、即ち、超自然と自然の厳密な区分にあることを指摘しておきたいのである。

同じキリスト教の伝統の中であってカントの如く「時間」がその哲学で重要な要因である者もいる。それは何に起因しているのであろうか。又、時間とは、外的な時間と内的な時間のどちらかとしてのみ考えられて、それ以外の理解の道はないだろうか。今後の課題である。(未完)

## 注

- 1) 東京工芸大学部紀要「時間論にみる一つの問題点 I」vol.7, No.2, 1982, 人文・社会編。
- 2) 上記ならびに vol.9, No.2, 1986, 人文・社会編。
- 3) 「Metaphysika」1.1, Georg Olms, 1973. vol.11, p. 468.
- 4) Platon "Timaeus", 37D.
- 5) Conf., XI, XXX, 40. Les Belles Lettres.
- 6) *ibid.*, XI, XXVI, 33.
- 7) Soliloquia, II, 7.
- 8) *ibid.*, XI, XV, 18.
- 9) *ibid.*, XI, XX, 26.
- 10) *ibid.*, XI, XXVII, 36.
- 11) *op. cit.*, 37D.
- 12) Physica, 221 b3~4.
- 13) *op. cit.*, XI, XIII, 15.
- 14) Principia Philosophiae, Adam et Tannery, VIII-1, p.26~27.
- 15) Principes, A.T. IX-1, p.49.
- 16) *op. cit.*, p.26.
- 17) *op. cit.*, p.49.
- 18) *op. cit.*, Pars Secunda, p.40~41.
- 19) *op. cit.*, XI, XXIX, 39.
- 20) *ibid.*, I, I, 1.
- 21) Discours de la Methode, A.T. VI, p.8.
- 22) *ibid.*, p.22~23.
- 23) Le Monde, A.O. XI, p.36~37.
- 24) Meditationes, A.T. VII, p.71.
- 24) Regulae, A.T. X, p.377~378.
- 26) Correspondance, 15. arril 1630, A.T. I, p.145.